THE GILLETTE MARRIAGE



FERDINANDO FREGA

Gillette の結婚

THE FAMILY · 16

結婚

彼が歩くと、男でありながら、かつて陸軍将校だったころの優雅さと姿勢がまだ見てとれた。だがそれだけでなく、寄宿学校で受けた教育も見てとれた。そこではひとつの規則がすべてに優先していた。口数は少なく、すべてに耳を傾けよ。

1962年のあの10月、彼は27歳だった。仕事をしていたタバコ屋に彼女が入ってくるのを見て、たちまち心を奪われた。

背が高く、人目を引き、見るからに南の女だった。女だけが心得ている、あの悪戯っぽいまなざしをしていた。だが、彼女はまだ16歳だった。名はジョヴァンナといったが、家族の誰にとっても、彼女はずっとジャンナだった。

彼はすぐに、その客に彼女のことを尋ねた。誰なのか、どんな家の娘なのか、どこの出なのか。年齢にはほとんど気をとめなかった。当時、この種の結婚は三重に祝福されていた。両家に、教会に、そして社会に。娘を片づけるための方法だと言われていたが、実際に片づけられていたのは息子たちのほうだけだった。

彼女の父は鉄道で働いていた。母は町で評判の仕立て屋を営み、お針子たちを雇って、高度な職人技を求め、その対価を惜しまず払う名家のために服を仕立てていた。

ジャンナにはもうひとり姉妹がいた。2歳近く年上の姉、フランチェスカだ。落ち着いていて穏やかな人で、その性質はいまも変わらない。

全体像がつかめると、父はその客に、あの一家に紹介してほしいと頼んだ。母を妻にしたかった。彼女と結婚したかった。彼女が

欲しかった。

こうして1963年4月、二人は結婚した。

彼が妻の長所を彼女の母親に褒めるたびに、母親は微笑んで、そんなことはないと言った。ジャンナは芝居のうまい娘で、決して許しを求めない、と。欲しいものは何でも、ただ手に入れるのだ、と。

父が、あの娘を自分の思い描く型にはめることも、作り変えることも決してできないと悟るまで、3か月もかからなかった。彼女はただ、はっきりした考えを持つ女だった。そしてそのことを、父にもさっさとはっきりさせた。

ある日、父は母の頬を平手で打った。当時、それは家庭における男の権利として認められていた振る舞いだった。

だが、母は取り乱さなかった。

家を出て刃物屋へ行き、肉切り包丁と牛刀を買った。

家に戻ると、父を見すえて、こう言った。

「今度またやったら、夜中にあんたを殺しに行くから」

その声には芝居がかったところも、ためらいもなかった。あるのは確信だけだった。

自分は本当にやる、という確信。

15日間、父は家の中で、別の部屋に鍵をかけて眠り、危険が去ったと確信できてからようやく出てきた。

そして、それが唯一の前例のままになった。

二人はレッジョ・カラブリアから300キロ離れたコゼンツァに移った。

当時は高速道路がなく、県道を走り、小さな町々の果てしない渋滞を抜けて、6時間近くかかった。

二つのまなざし。

3分にも満たない時間。

それだけで、ひとつの未来が決まった。肉体としては62年続き、だが二人が成したことのなかに、そして彼らの子である私たちのなかに、永遠に残りつづける愛のなかで。

コゼンツァ – 1963年

二人は、商店にも公共交通にも恵まれた街の中心部、コルソ・イタリアに家を借りた。だが新婚旅行が終わると、日常の暮らしへ戻るという段階は、誰にとっても未知のものだった。

毎週月曜、父は午前2時に家を出た。8時にある店の前で最初の客に会うためだ。300キロを走り、それから一週間、来る日も来る日も、少しずつ家に近づきながら仕事をし、金曜の夜にようやく家を取り戻すのだった。

そのあいだに、母は幸運にも、真向かいに住むノーラ・フォルミザーノと知り合い、二人は友人になった。

ノーラは、母の実母と同じ年ごろの女性で、母にとって母親のような存在になった。

ナポリの貴族の家の出で、その地域に赴任していた内務省の高官と結婚していた。子どもも3人いて、母よりほんの少し年下だった。

ある朝、母が生理の妙な遅れを打ち明けた相手は、彼女だった。それまでずっと順調だったのだ。

なぜかしょっちゅう尿意を感じるのだと母が説明するのを聞くと、ノーラは母を抱きしめて、こう言った。

「娘よ、あなたは身ごもっているのよ」

父が帰ってきても、母は何も言わないことにした。

父の反応を見たかったが、告げるのは復活祭まで待つつもりだった。

そして、そのとおりにした。

母は父に復活祭の卵を手渡して、こう言った。

「妊娠したの。レッジョ・カラブリアに引っ越さなきゃ。この子をここで産みたくない。家族にそばにいてほしいの」

転勤はそう簡単ではなかった。

業務上の理由による会社の承認が必要で、それが下りてからでなければ実行できなかった。

父は時間を稼げると思っていた。

だが1963年12月、母はひとりでバスに乗り、実家へ帰ってしまった。そして1964年1月11日、そこでテレーザを産んだ。

テレーザが生まれ、その知らせが一族に広まっても、親戚たちは何週間も経ってからでなければ会いに来なかった。

それが女としての母の誇りを傷つけ、将来についてのひとつの決断へと母を導いた。

姑や小姑との関係は、二度ともとには戻らなかった。

怒りは消えず、その瞳の奥に押しとどめられていた。

そのあいだも転勤の申請は手続きどおりに進み、1964年5月、父は二つ目の復活祭の贈り物を受け取った。

母はまた子を宿していた。

レッジョ・カラブリア – 1964年

1964年9月、ようやく会社の転勤が認められ、二人はレッジョ・カラブリアへ移った。

だが、母が自分の母親とのあいだに期待していた牧歌的な関係は、ついに実現しなかった。祖母は支配的で、自分の力も権威も誰にも譲らなかった。母を甘やかし、わがままを聞いてくれたのは祖父ただひとりで、母がその後にしたことはすべて、祖父しだいだった。

1965年2月21日のことだった。

サッカー場。

レッジーナ対コゼンツァ。

父と叔父がスタンドにいると、場内アナウンスが、ヴィンチェンツォ・フレーガなる人物に急ぎの伝言があるので入口までお越しください、と告げた。

父は冗談だと思い、その場を動かなかった。

すると、二度目のアナウンスが流れた。

「ヴィンチェンツォさん、試合は止められませんし、奥さんの陣痛も止められません。お帰りいただけませんか？　息子さんが生まれるところです」

みんなが笑った。

父はばつが悪くなり、自分のことではないふりをした。

私は、父の祝福とともにこの世に生まれた。

「息子が欲しかったんだろう。ほら、来たぞ。だがこいつは、一生背負う十字架になる」

すぐに皆に知らせが行き、彼らはまるで東方の三博士のようにやって来た。

息子の誕生は、家の名が続くことを保証する出来事とみなされていた。だが、女のいない男は不完全なのだということを、立ち止まって考える者は誰もいなかった。

私はそれからの62年間、そのことを説明しつづけることになる。

結局のところ、鎌と槌よりは十字架のほうがましだ。

2000年前の同僚を理解し、あの上ではどんな具合なのかを知るには、それで十分だった。

レッジョ・カラブリア – 1965年

ジャンナはまだ19歳だ。

子どもが二人いて、Gilletteで働く夫がいて、専業主婦になる気はさらさらない。

家のルールはすでに決まっている。

給料も、会社の手当もすべて、彼女の手を通る。

父はGilletteの経費精算で暮らしている。いつも働いていて、座ってキンタマをかいていることなど決してないからだ。

彼女は為替相場を追いはじめる。毎月、父がイタリア国内の販売コンテストで優勝し、ミラノの本社が賞品としてソブリン金貨を送ってくるからだ。

それから営業部長が、寝室の家具一式を家に送ってくる。

本物のブナ材。

作りつけのベッド。

マットレス。

枕。

毛布と羽毛布団。

夏用のシーツと冬用のシーツ。

すべてが独特のスタイルでデザインされていて、この話をするたびに、聞いた人は言葉を失う。

だが、彼女は恐れている。

安定が見えないのだ。

それを誰が責められるだろうか。

金曜の夜、父が玄関をくぐるなり、彼女は言う。

「子どもが二人いるの。新しい車が欲しい」

「でも、おまえは免許を持っていないじゃないか。どうやって運転するんだ？」

「明日、新しい車を買ってきて。シムカ1000がいい。5ドアの」

誰も彼女を抑えられなかった。

もし誰かが抑えようとしていたら、暮らしは生き地獄になっていただろう。

いちばんの解決策は、翌日ディーラーへ行き、180万リラの小切手を切り、保険に入り、鍵を渡すことだった。

それが正しい判断だったとわかった。

12日後、彼女は運転免許を手にしていた。

どうやってそれをやってのけたのか、誰にもわからずじまいだった。

一方、祖父は、祖母の仕立て屋が入っている物件をすべて所有していた。

祖父は、お気に入りの娘には弱かった。

ほんの数分で済んだ。

「お父さん、お母さんの仕立て屋に私の場所を空けて。半年以内に、毛糸と手芸用品の店を開くから」

二人は話をまとめた。

わずかな手さばきで、祖父は妻を別の場所へ移し、娘に独立した二つの店舗を与えた。

母は家に帰ると、父に300万リラ必要だと告げた。

そして、家を買いたいからという口実で、その金を父の両親に頼んでほしい、と。

父は話を合わせた。

金は届いた。

店の上に掲げる看板も届いた。

LANA BBB DI GENNY

だが、市の営業許可も必要で、彼女はそれを持っていなかった。

1960年代の終わり、お役所仕事は効率的とはとても言えなかった。

それは政治の内側に棲み、政治のなかを通り抜けていくトンネルだった。

その月曜の朝、母は父に、一日休みを取って私たちと家にいてほしいと頼んだ。

そして出かけていった。

砂漠を吹き抜ける風のように。

動いているのは感じるのに、いったいどこから吹いてきたのか、さっぱりわからない。

母は市役所へ行った。

そこで出くわした職員は、母が許可を申請すると、いまにも笑いだしそうになった。

気づいたときには、母は男の上着の襟をつかみ、窓口から半分引きずり出していて、5人がかりで母を引き離そうとしていた。

そこへ、たまたま市長が通りかかった。

名をピエトロ・バッターリアといった。

のちにイタリア議会で何期も務めることになる人物だ。

市長はその光景を眺めると、母の腕をとり、自分の執務室へ招き入れた。

10分後、母は第XV表の商業許可証を手に出てきた。

念のため言っておくと、それはイタリアでハイパーマーケットを開くのに必要な種類の許可だった — 最上位のもので、ふつうは政治的なコネなしには手に入らないものだ。

商売は軌道に乗った。

店の外にはセールスマンたちが列をなした。

やがて、ある同僚が父にこう言った。

「なあ、レッジョ・カラブリアに、セールスマンをひとり残らず手こずらせる店主がいるんだ」

すると父は答えた。

「ああ、知ってる。その女の話は、いろんなやつから聞いたよ」

だが、それが自分の妻だとは決して言わなかった。

店は、それ自体の命を持ちはじめた。

街の至るところから、人々がそこへ買い物に来た。

男の襟をつかんで壁に叩きつける女。

相手が役人だろうとマフィアだろうと、大した違いはなかった。

その名は街じゅうに響きわたった。

GILLETTEの男の妻。

コントロール

ある朝、市内の大通りで、トラックの運転手が不用意な運転をした。

トラックは母の車のドアに引っかかり、それをもぎ取った。

母がクラクションを鳴らしても無駄だった。

運転手は何が起きたのかまるで気づかず、そのまま走りつづけ、そのあいだに車はかなりの損傷を受けた。

ようやく止まると、運転手は道路に降りてきて、このくそ女どもは運転の仕方も知らない、とわめいた。

女は家で子どもでも育てていたほうがいい、と大声で言い放った。

それから、運転席に座る母をまっすぐに見すえ、マフィアさながらの調子で罵声と脅しを浴びせた。

後部座席には、4歳の姉と3歳の私がいた。

母は私たちに、動かないでと言った。

すぐ戻るから、と。

外で正確に何が起きたのか、私たちは結局知らずじまいだった。

わかっているのはただひとつ、そのマフィアの男が最後には母の前にひざまずき、その手に口づけして許しを請うていた、ということだけだ。

それから数日、店の客は異常なほど増えた。

あまりに多くの客がやって来るので、父はとうとう、ちゃんと利幅をのせているのか、それとも商品をただで配っているのかと尋ねた。

父が家で腰を下ろす間もなく、母は言った。

「明日フィアットの販売店に行って、白のフィアット124スペシャルを買ってきて。1400のエンジンで、4ドアの」

「だがジャンナ」と父は答えた。「いくらするか、わかってるのか？」

「365万リラ。いまはあなたが払って。修理できないシムカの保険金が下りたら、返すから」

それで十分だった。

12時間もたたないうちに、真新しい車が家の前に停まっていた。

口にされたのは、ひと言だけだった。

「カラブリアじゃ、この車は速くて反応がいいから強盗に使われるって話だぞ。なんでこんなものが要るんだ？」

母は真顔で父を見て、答えた。

「いずれわかるわ」

そして朝、父が仕事に出かけるとき、母はいつも尋ねた。

「今日はどこへ行くの？　お昼はどこで食べるの？」

父は、120キロ先にいるかもしれないと答えるのだった。

すると私たち三人が、不意にそこへ現れるのだった。

父はそれを愛だと思っていた。

母はただ、自分の資産を見張っていただけだった。

やがて母は、その習慣を失いたくなくて、同じコントロールの仕組みを私に移そうとした。

どちらも勝たなかった。

母も。

私も。

母は、コントロールとは、取り上げることと殴ることで行うものだと信じていた。

前者は私にはほとんど効かなかった。私はすぐに、欲しいものを別の何かへ切り替えてしまったからだ。それが母を逆上させた。

後者については、ただ何も感じなかった。

反応しなかった。

泣かなかった。

悪態もつかなかった。

私は痛みをコントロールしていた。

何年ものち、その同じコントロールが、ほかの困難を乗り越える助けになる。

母はいつも、私たちは同じだと信じていた。

だが、私の一部が父のものだということを、決して受け入れなかった。

そして父は、事実で勝った。

そして、沈黙で。

現場

金曜の夜、週の売上数字を提出したあとにかかってきたディストリクトマネージャーからの電話は、父を考えこませた。陛下 — Gilletteイタリアの営業部長ラッファエーレ・ディ・トゥッリオ — が3日間、父と一緒に現場を回るというのだ。待ち合わせは月曜の午前7時30分、レッジョ・カラブリアのExcelsiorホテルだった。

その週の行程表には、市内一円の得意先回りと、周辺の郊外へのいくつかの訪問が含まれていた。すでに7月半ばで、この土地がどれほど暑くなるかは誰もが知っていたので、母は父の鞄に替えのシャツを一枚しのばせ、昼食の前にさっぱりして着替えるといい、と言い添えた。

父は制服一式に身を固めて約束の場に現れた。非の打ちどころのない紺のスーツ、水色のシャツ、ネクタイ、そして自分を雇ってくれた男に払うべき敬意のすべて。

ひどく暑い日で、二人とも服まで汗でぐっしょりになった。だが、訪問のあいだ、どの会話も売上の数字が中心ではなかった。話題は、父が幸せかどうか、家庭生活をどう感じているか、会社にどうなじんでいるか、ということだった。

翌日、父は同行訪問の2日目に臨んだ。状況を読み違えたのか、自分の数字を信じすぎたのか、父は過ちを犯した。前日と同じスーツで現れたのだ。乾いてはいたが、前日の汗の跡がまだはっきりと残っていた。

ディ・トゥッリオは長い一瞬、父を見つめ、何も言わず、それからバールでコーヒーでも飲もうと誘った。

「ヴィンチェンツォ」と彼は言った。「Gilletteは刃を売っているんじゃない。Gilletteは信頼を売っているんだ。男が毎朝、自分の

喉に刃を当てるのは、それを売った男を信頼しているときだけだ。そして信頼は、清潔なシャツから始まる」

父は答えなかった。わかったのだ。

その夜、父は家に帰ると、母に、おまえが正しかったと言った。またしても。

父は同じ過ちを二度と犯さなかった。

3日目、ディ・トゥッリオはExcelsiorの前で父と握手し、言った。「君は遠くまで行く。人の話を聞くからだ」

その教えが、わが家の掟になった。

母は、目に見えるものすべてを掌握していた。許可証、店、車、金。

父は、目に見えないものすべてを掌握していた。手本、沈黙、忍耐、そして2日間血の汗を流していても、一分の隙もない姿で現れるという品位。

これこそが結婚というものなのだと理解するのに、私は60年かかった。

許可を手に入れるために、職員の襟をつかむ人間がひとり。

そして、会社が自分を恥じることのないように、公衆トイレでシャツを着替える人間がもうひとり。

GILLETTEの結婚

結婚とは約束ではない。刃だ。

丁寧に扱えば、62年のあいだ毎朝、きれいなひげ剃りを与えてくれる。

ぞんざいに扱えば、喉を掻き切る。

父と母は、一度も互いを切りつけなかった。

ただ、来る日も来る日も、二人でその刃を握る術を学んでいったのだ。

フェルディナンド・フレーガ
Gillette Man ⚔️